見えない、見えづらい子の発達とその支援

浦和大学
香川　スミ子

１．私の立場：臨床経験（30 年）から分かったこと
　職歴：盲学校教員（１年）、東京都心身障害者福祉センター視覚障害科幼児班(11 年)、
幼児科（18 年）

・　資格：盲学校教員普通科１級免許状

２．東京都心身障害者福祉センターでの業務内容

・視覚障害科：視覚障害乳幼児の通所（訪問）による発達支援、養育支援、触運動コントロール学習（初期学習）

・幼児科：障害幼児の発達相談に係わる視機能評価、発達評価、発達支援等の情報提供、
群別標準発達モデルの適応

３．養育者は何を期待しているか

４．視覚障害が発達に及ぼす影響

子どもは誕生した直後より、立体的な空間内に生活している。外界に存在する多様な物を自己との関連の中で位置づけ、物同士の関係を理解するようになる。このような空間認知行動は主として視覚によって調整されており、視覚以外の感覚では正確さや認知可能な範囲に制限がある。

５．視覚障害児の発達

•「盲幼児は障害のない子どもと同じ過程で発達する。学習方法が同一ではないため、発達の速度が緩慢な場合もあるが、全体として重大な遅れをもたらすことはない。」ﾛｰｴﾝﾌｪﾙﾄﾞ

↓

・　発達の領域によって、行動の獲得に時間がかかるなど、細部では異なることがある。

＊視覚からの情報の欠如が、初期の発達段階に影響を与える例。

＊初期の発達段階では、有効に視力が使えない例。

６．発達の規定要因

・重複障害（視覚以外の知的障害、中枢性の運動障害、てんかん発作等）：一概に論じられない。

↓

重篤な障害以外は出生直後に分かることは少ない。
親は発達の伸び悩みなどによる育児上の対応に悩む。

・視覚障害の程度、障害発生の時期

↓

個々の子どもの発達の状態や発達の予測を的確に把握する方法の開発が必要

７．群別発達標準モデル

＊障害児の発達過程は障害の種類や程度によって、同じ障害であっても知的発達段階によって多様な状態を示す。障害のない子どもの発達過程をそのまま参考にすることはできない。

•「モデル」とは、障害の種類、程度、生活年齢、知的発達水準などの条件が同じか、類似している子どもたちを一つのグループ（群）としてまとめ、その群の発達の状態を明らかにするもの。

８．群別標準モデル例

１）特定の移動行動を獲得するための必要最低条件

２）姿勢保持行動を獲得するための必要最低条件

３）盲児の食事行動
４）盲児の排泄行動
５）視覚障害児の「物・玩具を使用する遊び」の発達
６）点字習得過程ー事例
９．盲学校幼稚部・保育所の役割は何か？
10．提案したいこと
１）データの共有
（１）子どもの基本属性
①眼疾②視力③失明時期④年齢⑤未熟児（在胎日数、生下時体重）⑥合併症（肢体、脳波、その他）
（２）子どもの発達の現状
①知的発達段階の目安となる行動（発語、理解、遊び）
②適応行動（運動、身辺自立、遊び）
＊定期的チェック（１ヶ月ｏｒ３ヶ月）
11．関係機関との連携